

■テーマ展

夏休み！ふしぎ発掘

会期 7月17日(土)～8月29日(日) 会場 特別展示室

近年は発掘の報道に接したり、復元整備された史跡公園を訪れたりして、遺跡の発掘調査を身近に感じる方も多いことと思います。ただ実際に発掘に参加したことがないと、「地面を掘っていった古いものを見つける」といったイメージでとどまっているかも知れません。今回の展示会では、発掘はどのように進められているのか、考古学では掘り出したものからどのように昔の暮らしを調べているのか、といった点にスポットを当てて紹介します。

これも考古学？

人類の歴史がどこまで遡るのか、考古学者と人類学者が協同してアフリカなどで調査を進めています。それでは人類以前はどうでしょう？古生物学でも恐竜化石の発掘というように共通する方法が取られますが、「もの」を通じて人類の歴史を探るのが考古学なので、古い化石は考古学の対象外です。

一方、考古学者は古い時代のものだけを追いかけているわけではありません。最近では近現代も考古学の対象となってきました。太平洋戦争当時の陣地や防空ごうの考古学的な調査が進められています。また、岩手県内では江戸時代から明治時代にかけての民家跡が発掘された例があります。それでは、そうした発掘調査はどのように行われているのでしょうか？

発掘調査とは？

以前、埋蔵金発掘の様子をTVで放送したことがありました。その内容は、絵図や伝承からこの辺というあたりをつけて、上から機械でどんどん掘り下げていき、もう限界だという深さに達したところで見つからなければまた隣を掘る、といったものでした。本気で埋蔵金を探すなら考古学者に協力を求めれば良いのに、と思ったもので



す。考古学者なら、まず穴そのものを探します。地面を丁寧に削っていき、わずかな土質の違いから掘り返された場所の輪郭を見つけ出します。その後は埋め戻された土を除去していったら、もし底に何か埋まっていれば間違いなく掘り出すことができます。小判がなくても陶器のかげらなどから、この穴がいつ頃掘られたもので、埋蔵金に関わりがあるかどうかを判断する手がかりも得られます。最近では、電波の地中の伝わり方によって、掘らずに埋蔵物を探すレーダーの技術も利用されています。

このように、遺跡の発掘とはやみくもに地面を掘るわけではありません。考古学において何より大事なのは、どの地層から、どういう状態で見つかったのか、複数のものがどんな位置関係にあったのかという記録なのです。これが資料の意味を考える基礎になります。

土器を調べる

<土器で時代を判定する>

土器は時代を決める重要な材料として今なお考古学では主役の位置を占めています。考古学者は掘り出された小さい土器破片を見て、この遺跡は〇年前頃だろう、と言い

当ててしまうのです。なぜそんなことができるのでしょうか？

土器の文様は一見自由気ままに描かれたように見えますが、時代・地域ごとに流行のデザインがあり、そこから大きく外れたものはありません。形や大きさも同様に時代を反映して変化していきます。こうした時代と地域を単位にしたまとまりを土器型式と呼び、小さな破片でも型式を判断できることが多いのです。一つの土器型式はおよそ30年～100年程の時間幅を示し、古いものが下から出るという原則に従い土器型式による年表が出ています。

<破片で出てきたら・・・>

掘り出される土器類はたいてい破片の状態です。しかも、いろんな個体の破片がごちゃ混ぜになっているのがほとんどです。発掘されたこれらの土器破片をいかにして



元の状態に近づけていくか、腕の見せ所です。様々な破片を広げ、文様や厚み、色合い、質感などを手がかりに同一個体の破片を集め組み立てていくのはまさに上級者向けジグソーパズル。足りない所を石膏などで埋めていきます。完成したら次には写真撮影、詳細なスケッチ図＝実測図を作成して資料化していきます。

石器を調べる

<石器の作り方>

鉄が普及するまでの長い間、刃物の道具は石器が主役でした。ただ一口に石器と言っても、その形態、用途は様々です。石器の製作者は素材となる石の性質を見極めて、最適な石を利用したことがわかっています。硬い石の割り方にも工夫が見られます。石器の素材となる剥片を取る時、剥片の縁に細かい加工を入れて石器の形態を仕上げる時、それぞれで用いる技法や道具も異なっています。

<石器の使い方>

石器の使われ方を調べるときには、石器使用痕と呼ばれる特有の微細な傷を観察する方法が取られます。石器の縁が肉、骨、木、草といった被加工物の違いに応じて、違ったタイプの傷ができます。これを顕微鏡で観察して、何を加工した石器なのか、傷の方向や程度からどのように石器を動かして使ったかという推定が行われています。

骨・貝殻を調べる

<貝塚の発掘・整理>

岩手県では三陸沿岸に数多くの貝塚が分布しています。貝塚は日常生活で排出された食べかすが集まった、いわばゴミ捨て場です。貝殻に含まれるカルシウムの作用により獣骨や魚骨の保存状態が非常に良いため、情報の宝庫とも言われる場所です。

近年の貝塚調査では掘り出した貝層を土ごと研究室に持ち帰り、1mmの目のふる



1mm目のふるいにかけてた貝層

いにかけて、これに含まれる様々な種類の骨や貝殻を調べるという調査が行われています。根気の要る作業ですが、肉眼では見逃してしまうイワシのような小型の魚骨についても、利用のされ方がわかってきました。

<貝殻の利用>

美しい貝殻は装飾品の素材として縄文時代に盛んに利用されています。岩手県でも二枚貝に穴を開け腕に通した貝輪、多くの巻貝を紐で連ねた首飾りなどの出土が知られます。どのような貝が使われているのか、その生息地を調べると驚くべきことがわかってきました。岩泉町岩谷洞穴などからアマオブネガイという小さな巻貝製の装飾品が出土しています。この貝は伊豆諸島など房総半島以南に生息しており、はるばる運ばれてきたものです。同じように南海産のオオツタノハという貝を加工した貝輪も県内から出土しています。このように、南の貝が珍重され、交易によって運ばれてきたことが明らかに becoming ますます。



花泉町貝鳥貝塚出土オオツタノハ製貝輪

考古学と自然科学のタイアップ

<交流を探る>

運ばれているのは貝に限りません。新潟県の西端でしか産出しないヒスイ製装身具や、北海道産の黒曜石を素材とした石器が岩手県でもみつかっています。これらは岩石を構成する元素の分析により、産地が確かめられています。

土器類では粘土の元素成分や、生地に含まれた鉱物の観察から、産地の特定が行われています。県内で出土した古墳時代～平安時代の須恵器には近畿・東海地方の製品が含まれることがわかりました。

<年代を測る>

先に説明した土器による時代の推定は「相対年代」といい、AとBではどちらが古いかを判断する方法でしたが、今では理化学的な方法により〇〇年前のもの、といった「絶対年代」を調べる方法も発達してきました。木製品に見られる年輪から伐採された年を特定する年輪年代法によって、平泉町から出土した容器類が西暦1158年などというように、藤原氏の時代と一致することが確認されています。

考古学を体験してみよう

この展示会では考古学に親しんでもらうため、実際に資料を手にとったり、顕微鏡を使って観察するコーナーも設けています。身近だけれど実は奥の深い考古学を通じて、はるか昔の世界を想像してみませんか。

(学芸員 高木晃)

ふしぎ発掘ゼミナール

※小学校中・高学年程度の内容です

7月17日(土) 骨のふしぎゼミ

7月24日(土) 石器のふしぎゼミ

8月7日(土) 土器のふしぎゼミ

8月28日(土) 貝がらのふしぎゼミ

各回午後1時30分～2時30分 定員20名